

中村欣一郎市長の

山椒は小粒でも…

男の子の思い出は
私の思い出



ゴールデンウィーク、ぽつかり予定の空いた晴天の日、前から気になっていた市内のエコツアーに参加しました。

小浜の海岸から目の前の三ツ島を、シーカヤックで漕いで回るツアーです。私はカヤックを持っているのですが、観光客になったつもりで愛犬を連れて参加しました。

浜辺でグローブとシューズ、救命胴衣を身に付け、インストラクターの教えに従ってパドルを手に、まずは漕ぎ方を教わります。続いて乗り込み方、座り方、心構えなど諸注意。

この日、ちようど一緒にあったのは、埼玉から来た親子連れでした。30代くらいのお父さんと小学1年生の男の子。家族で伊勢志摩へ来たけれど、下の子が熱を出したので、お母さんはその子とホテルで休んでいるとのことでした。朝になって何して遊ぼうかということになって、手ぶら

で楽しめるこのツアーを見て、名勝三ツ島はわずか500メートル沖合の島。



いくつも並ぶ釣り筏をぬけ、

島巡りの遊覧船に手を振って応えたり、海藻の生い茂る海底をのぞき込んだり、船の往來を見守る観音様を拝んだり、漁をする海女さんを間近に見たり、干潮で三ツ島のつながったところを歩いたり…

そして男の子はうちの犬が気に入ったようで、「帰りは

こつちに乗ってみる？」と声をかけたら、よろこんで乗り込んできました。こちらを向いて座った表情はとても満足気でした。



数日後、お母さんからの丁寧な礼状とともに男の子からの手紙も届きました。彼が「しちよう」のことがわかるようになるには、もう少しばかり時間がかかるのだと思います。しかし、わずか1時間半の短いツアーでしたが、鳥羽の海の青さと楽しさは心に焼き付いたことでしょう。



「当たり前」のありがたさ

「小学生の時、学校が終わると、トムとジェリーを見るために飛んで帰ったのに、おじいさんがテレビの前に陣取って相撲を観戦している。30分のチャンネルの攻防が繰り広げられる。ガチャガチャとチャンネルを奪い合った」

先日こんな話を聞きました。私にはその情景が鮮明に浮かび上がります。昭和30年代から40年代にかけてテレビは国民の娯楽になりました。テレビという娯楽に楽しみを見つけた老人。テレビという新しい刺激にワクワクする子ども。テレビという新しいメディアは魅力的で、両者に「我慢して譲ってあげたら」と言っているのは、大変酷な言葉であったように思います。

亡くなった西城秀樹さんが出演していた「寺内貫太郎一

家」のちやぶ台返し家族風景は、昭和の家族の関係を色濃く残していました。人は家族という社会を基本として、親戚・隣近所・地域社会とさまざまな人間関係で成長してきました。

以前に「人にやさしい社会づくり」のことを書きました。人は「やさしく・便利な世の中」という思いで動いていると思います。そして、たくさんの方が開発、改善されてきました。しかし、子ども目線で見ると、あつて当たり前の中を作り出してしまい、ありがたみを感じなくなっている気がします。

人間を鍛える上で、厳しい状況が時として必要なこともあります。今、子どもたちにとってはさまざまな物があつて当たり前で、自分を鍛える術を失っています。そのことを伝えられるのは、物や娯楽が少なかった時代を知る大人たちです。歴史文化を次世代に伝えていくことが今大切にしていかねばならないことだと思います。



Vol.171

教育委員会生涯学習課 ☎ 1268